

稲作技術情報 No. 3

令和8年7月22日
鳥取県産米改良協会

■中国地方の平年の梅雨明けは7月中下旬ですが、今年度は7月8日頃に明けました。6月4日頃の梅雨入り以降、6月上・下旬の降水によって河川の水位は確保されていましたが、梅雨明け以降は降雨が少なく、今後の気温は平年より高い予報のため渇水が懸念されます。

■幼穂形成以降は水が貴重になりますので、地域の水田に水が行渡るように「番水」や「節水栽培」に取り組みましょう。

・ 中干しが終了し、幼穂形成期以降における土壌の乾燥は厳禁だが、湛水状態が継続すると土壌硬度が失われ、結果的に早期落水につながる恐れがあるため、適度な湛水と減水を繰り返す「間断かんがい」を行う。

■中干しの最後のチャンスです。

・ 目標茎数を確保したら直ちに中干しを行うこと。中干しが不十分な場合、幼穂形成期以降の葉色が濃くなることがあり、徒長して倒伏のリスクが増すとともに、籾数過多によってくず米が増加する。

・ 田んぼに立って靴底が軽く沈み、スタスタ歩けるくらいまで干す。

・ ただし、地面に大きいひび割れが入ると漏水を助長することがあるため、田面の状態をよく観察し、中干しの終了時期を判断する。

・ 中干し終了後は、いきなり湛水せず、3日程度走り水を行い、以降は間断かんがいを行う。

☆ 適正な中干しにより、根の健全化、倒伏防止、適正籾数確保を図り、品質・食味を向上しましょう。

■穂肥の適正施用により、品質食味の安定化を図りましょう。

・ 登熟期の肥切れは、白濁粒の増加や粒張りの低下を助長し、品質を著しく低下させる。

・ 「コシヒカリ」「星空舞」「ひとめぼれ」は、早期倒伏の防止に留意するため、葉色や生育量に応じて穂肥を施用し、「きぬむすめ」は、幼穂形成期に合わせて積極的に穂肥を施用しましょう。

I 天気概況

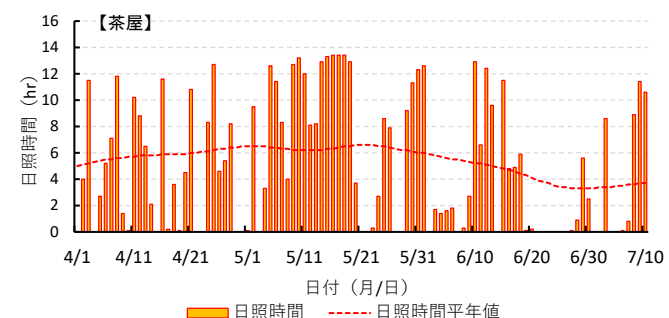
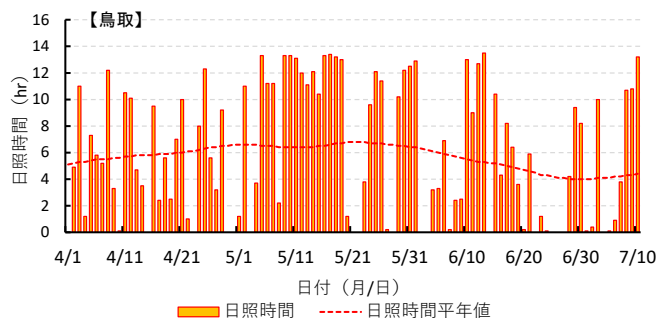
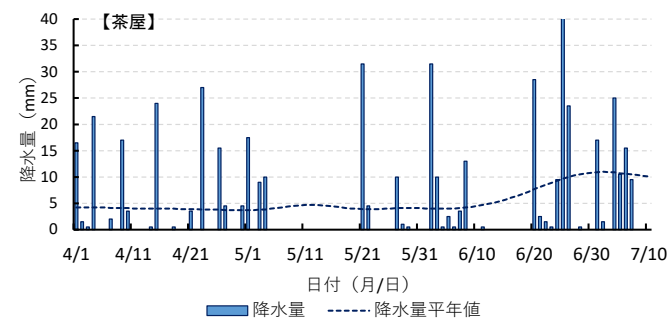
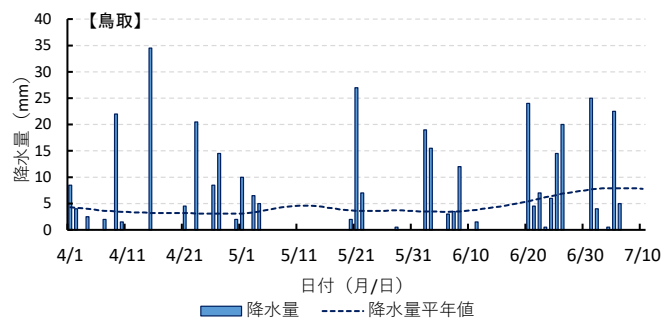
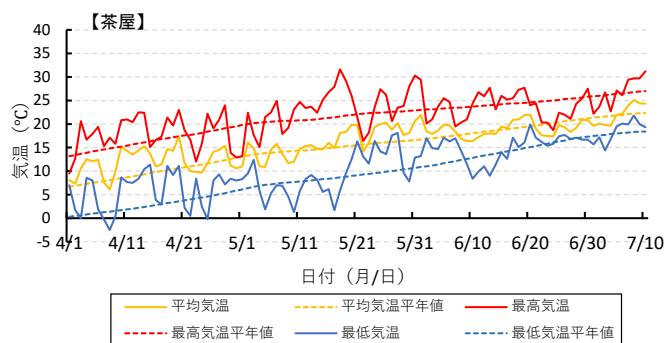
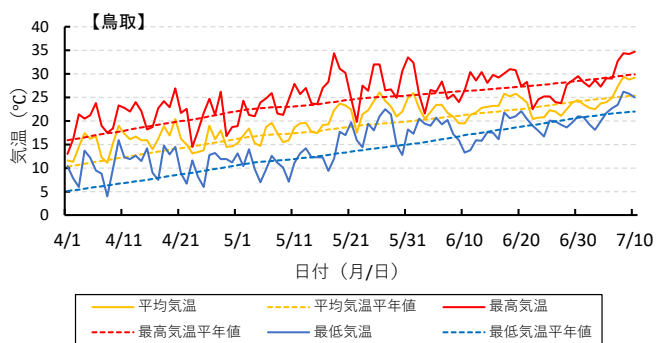
1 天気予報

中国地方（山口県を除く） 1か月予報（07/18～08/17）		
2026年07月16日14時30分 広島地方気象台 発表		
特に注意を要する事項		期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。
向こう1か月 07/18～08/17	天候	平年と同様に晴れの日が多いでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率70%です。
1週目 07/18～07/24	気温	1週目は、高い確率80%です。
2週目 07/25～07/31	気温	2週目は、高い確率70%です。
3～4週目 08/01～08/14	気温	3～4週目は、高い確率50%です。

気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）			
気温	中国地方	向こう1か月 07/18～08/17	10 20 70
		1週目 07/18～07/24	10 10 80
		2週目 07/25～07/31	10 20 70
		3～4週目 08/01～08/14	10 40 50
降水量	中国地方	向こう1か月 07/18～08/17	30 40 30
日照時間	中国地方	向こう1か月 07/18～08/17	30 30 40

■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)

2 気象経過(アメダスデータ4～6月)



各期間の日降水量及び日照時間の合計と平年比較 (鳥取アメダス)

月旬 (期間)	6月上旬 (6/1～6/10)		6月中旬 (6/11～6/20)		6月下旬 (6/21～6/30)		7月上旬 (7/1～7/10)	
当年・平年	令和8年	平年	令和8年	平年	令和8年	平年	令和8年	平年
降水量(mm)	53.0	35.1	25.5	45.6	52.5	66.8	57.0	75.9
日照時間(hr)	44.4	59.5	68.3	50.9	29.0	42.1	50.0	42.8

鳥取アメダスデータでは、6月上中旬に気温が平年よりやや高めだったが、下旬はやや低めに推移した。降水量は6月中旬は降雨の無い日が多く、平年より少なかったが、6月上・下旬、7月上旬に50mm以上あり、概ね平年並であった。日照時間は、6月下旬が少なかったが、それ以外は概ね平年並であった。

Ⅱ 生育概況

○現地ほ場

- ・生育は全体に順調で、目立った病害虫の発生は見られていない。
- ・茎数確保は順調で、中干しに入っているほ場が多いが、降雨により十分に土壌硬度が確保できないまま終了しているほ場が散見される。

○作況調査ほ場

<5月11日移植> ひとめぼれ・コシヒカリ

- ・ひとめぼれは、6月30日に幼穂形成期を迎えた。(平年差-1日)
葉齢、茎数及び草丈は平年並であるが、葉色値は高い。
- ・コシヒカリは、6月30日に幼穂形成期を迎えた。(平年差-4日)
葉齢は平年並であるが、茎数は少なく、草丈は短く、葉色値が高い。

<5月25日移植> コシヒカリ・星空舞・きぬむすめ

・移植後35日時点で、葉齢は平年並、草丈は平年並からやや長く、葉色値は高い傾向であり、茎数はコシヒカリではやや多めだが、星空舞ときぬむすめでは少ない傾向である。

令和8年度 水稻生育状況（農業試験場 作況田）

5月11日移植(4月17日播種)

調査項目		ひとめぼれ			コシヒカリ		
		本年	平年	差・比	本年	平年	差・比
生育ステージ	最高分けつ期	6月25日	6月27日	-2	6月29日	6月28日	+1
	幼穂形成期	6月30日	7月1日	-1	6月30日	7月4日	-4
	出穂期		7月24日			7月26日	
	成熟期		8月26日			8月28日	
苗乾物重(mg/本)	田植時	15.4	15.5	99	15.8	16.4	97
葉 齢 (葉)	田植時	3.2	3.4	-0.2	3.1	3.3	-0.2
	15日後	6.2	5.9	+0.4	5.7	5.7	-0.0
	25日後	8.6	7.6	1.0	7.9	7.5	+0.4
	35日後	10.1	9.4	+0.7	9.5	9.3	+0.2
	45日後	11.4	10.8	+0.6	10.9	10.6	+0.3
	幼穂形成期	11.8	11.5	+0.2	11.2	11.8	+0.0
	出穂期(止葉葉位)		13.9			13.6	
茎 数 (本/㎡)	田植時	57	62	92	57	57	100
	15日後	72	74	97	57	64	88
	25日後	220	183	120	143	155	92
	35日後	377	339	111	269	286	94
	45日後	531	553	96	420	450	93
	幼穂形成期	525	550	95	435	459	93
草 丈 (cm)	田植時	10.4	10.0	103	10.6	11.3	93
	15日後	18.6	19.2	97	18.2	23.1	79
	25日後	25.9	22.5	115	25.4	26.6	95
	35日後	34.8	31.0	112	36.0	32.9	109
	45日後	52.1	49.5	105	49.5	51.6	96
	幼穂形成期	59.4	62.7	95	58.6	69.4	84
葉 色 (SPAD値)	田植時	26.9	26.7	+0.3	27.7	25.0	+2.7
	15日後	34.2	29.3	+4.9	31.2	26.6	+4.6
	25日後	40.0	37.8	+2.1	35.6	36.0	-0.4
	35日後	39.5	39.6	-0.1	36.1	38.1	-2.0
	45日後	38.2	38.3	-0.1	40.3	36.9	+3.5
	幼穂形成期	41.1	37.6	+3.5	43.6	34.2	+9.4
	出穂期		37.1			39.1	

- 注1) 平年値は直近5年間の平均値（四捨五入）。
 2) 令和5年度から全ての品種で調査地点の栽植密度を19.0株/㎡に統一。
 3) 田植時茎数は植付苗数と栽植密度で計算した値

5月25日移植(5月5日播種)

調査項目		コシヒカリ			星空舞			きぬむすめ		
		本年	平年	差・比	本年	平年	差・比	本年	平年	差・比
生育ステージ	最高分けつ期		7月7日			7月9日			7月8日	
	幼穂形成期		7月12日			7月19日			7月15日	
	出穂期		8月3日			8月7日			8月5日	
	成熟期		9月5日			9月12日			9月22日	
苗乾物重(mg/本)	田植時	14.0	16.8	83	12.8	16.2	79	13.4	15.8	85
葉 齢 (葉)	田植時	3.3	3.3	-0.0	3.3	3.4	-0.1	3.3	3.2	+0.2
	15日後	6.5	6.1	+0.4	6.5	6.1	+0.4	6.3	5.9	+0.5
	25日後	8.5	8.2	+0.2	8.5	8.3	+0.3	8.4	8.0	+0.4
	35日後	10.0	10.1	-0.1	10.2	10.0	+0.1	9.9	9.9	+0.0
	45日後		11.4			11.4			11.3	
	幼穂形成期		11.8			12.5			12.8	
	止葉葉位		13.9			14.4			15.2	
茎 数 (本/㎡)	田植時	57	57	100	57	57	100	57	62	92
	15日後	105	75	141	96	80	119	86	87	98
	25日後	257	194	133	248	209	118	240	220	109
	35日後	393	363	108	394	443	89	364	421	86
	45日後		414			493			498	
	幼穂形成期		405			482			446	
草 丈 (cm)	田植時	12.2	13.6	90	11.7	12.8	91	16.5	13.9	118
	15日後	25.1	24.9	101	23.6	22.3	106	25.9	21.2	122
	25日後	27.8	30.1	92	25.8	27.5	94	27.0	28.3	96
	35日後	47.7	45.6	105	43.3	39.9	108	43.7	42.3	103
	45日後		65.9			59.5			66.6	
	幼穂形成期		71.5			72.8			86.8	
葉 色 (SPAD値)	田植時	24.3	26.4	-2.1	25.2	26.6	-1.3	26.9	26.6	+0.3
	15日後	35.5	30.3	+5.2	35.1	31.1	+3.9	34.3	31.2	+3.1
	25日後	36.4	36.6	-0.2	36.7	36.6	+0.0	35.6	37.7	-2.1
	35日後	42.5	37.0	+5.5	40.5	37.2	+3.3	40.6	36.8	+3.9
	45日後		35.1			36.1			36.7	
	幼穂形成期		34.3			32.5			30.7	
	出穂期		37.4			36.3			36.0	

- 注1) 平年値は直近5年間の平均値（四捨五入）。
 2) 令和5年度から全ての品種で調査地点の栽植密度を19.0株/㎡に統一。
 3) 田植時茎数は植付苗数と栽植密度で計算した値

Ⅲ 病害虫発生状況

○いもち病

・7月21日現在、一部の常発地で葉いもちが発生しているが、広域発生には至っていない。出穂期が近づいている極早生品種及び早生品種については、穂ばらみ期及び穂揃い期の防除を徹底する必要がある。

・水稲いもち病発生予測システム(ブラスタム)の判定結果

ブラスタムによる葉いもちの感染好適条件又は準感染好適条件は、6月25日、26日、27日、7月3日、5日、6日及び7日に広域で出現した(表1)。

表1 ブラスタムによる感染好適日の出現状況

日付	鳥取	青谷	岩井	智頭	倉吉	塩津	米子	境	茶屋
6/25	●	●	●	●	●	○	●	—	○
6/26	●	—	—	—	●	—	—	—	—
6/27	—	●	●	—	●	●	●	—	●
6/28	—	—	—	—	—	—	—	—	—
6/29	—	—	—	—	—	—	—	—	—
6/30	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7/1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7/2	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7/3	●	—	●	○	●	●	●	—	●
7/4	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7/5	●	—	●	●	—	●	●	—	—
7/6	—	—	●	●	—	●	—	—	—
7/7	—	—	—	●	—	—	—	—	○
7/8	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7/9	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7/10	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7/11	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7/12	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7/13	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7/14	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7/15	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7/16	—	—	—	—	—	／	—	—	—
7/17	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7/18	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7/19	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7/20	—	—	—	—	—	—	—	—	—

注) ●感染好適日、○準感染好適日、／判定不能
判定不能は、気象データの欠測等によるもの

※ ブラスタムについて

ブラスタムとは、アメダスの気象データを用いて、葉いもちの感染に好適な条件であったかどうかを広域的に判定するシステムである。いもち病は感染後、発病するまで約1週間かかるため、感染好適日が広域に出現してから、約1週間後に広域に新しい病斑が確認できる。

Ⅳ 技術対策

1 中干し・水管理

(1)適期に中干しを行う

中干し適期であるにもかかわらず、常時湛水が継続し、落水が実施されていない水田では、ガス湧きによって根傷みが生じ、下葉が変色していることがある。

コシヒカリ、ひとめぼれの早生品種は、幼穂形成期を迎え、要水量が飛躍的に大きくなる生育段階に入る。幼穂形成期以降に土壌を乾燥させることはできないので、幼穂形成期までが中干しを実施する最後のチャンスである。

(2)中干しの効能

落水によって、有機酸や硫化水素等の水溶性有害物質の除去し、土壌へ酸素を供給することで、土壌還元が抑制され、根の健全化が図られるとともに、無効分げつの発生抑制、下位節間の伸長抑制の効果がある。

また、土壌を硬くすることで、コンバイン収穫時の機械作業効率が向上する効果がある。

中干しが不十分な場合、根の活力が低下することで、高温登熟に耐えられなくなることが懸念される。

※ 田植えが遅いほ場における中干しの遅れは早期倒伏につながるため、必ず適期に中干しを実施すること。

※ 平成26年の調査では中干しを適正に行うことにより、収量が適正化され、品質や食味が向上することも改めて確認されている。

(3)中干し実施中にいもち病が発生した場合

中干し実施中に、葉いもちの発生が見られた場合は、直ちに入水する。なお、上位葉に急性病斑が見られる場合は、治療効果を有する薬剤で緊急的に防除する。

(4)中干し後の水管理

中干し後は、いきなり湛水せずに、走り水を行った後、ゆっくりと給水し、土を湿潤状態に保つことで根の活性維持に努める。2～3日走り水で慣らした以降は間断かんがい(3日入水、2日干す等)管理する。

2 雑草対策

田植え後に水深を確保できず、除草剤の効果が不十分となっている水田が散見される。雑草を取りこぼした場合、後期除草剤散布により対応する。

このとき、ベンタゾンを含む粒剤と液剤は落水処理し、それ以外の除草剤は湛水散布する剤が多いが、ベンタゾンを含まない剤でも落水処理するものが増えているため、各薬剤の適用表を確認して使用すること。シハロホップブチルを含む粒剤は茎葉吸収を促すため深水とし、成分濃度を保つため、処理後は入水を控える。

3 病虫害防除(いもち病)

- 置き苗は、本田のいもち病の伝染源となるため、早急に処分する。
- 育苗箱施用剤を使用しても十分な効果が得られない場合があるため、ほ場の見回りなどを行い、早期発見に努める。
- 「コシヒカリ」、「ひとめぼれ」、「きぬむすめ」などの本病に弱い品種の栽培、窒素肥料の多施用、遅植えなどの条件では発生しやすい。上位葉に急性型病斑がみられた場合は、病虫害防除指針などを参考にして、直ちに治療効果のある粉剤、水和剤などにより防除を行う。
- 本田施用粒剤(オリゼメート粒剤等)を使用する場合は、予防防除が基本であり、発生後では十分な効果が得られない。なお、粒剤を使用する場合は、各薬剤の使用基準を確認して湛水散布を行う。
- 降雨が続く場合は雨の止み間に防除を行い、適期を失しないように注意する(粉剤散布後から降雨が3時間程度なければ防除効果は十分にある)。
- 鳥取県では、平成26年にストロビルリン系薬剤耐性イネいもち病菌の広域発生が一部の地域で認められ、平成27年以降、本系統薬剤の使用を中止していた。しかし、その後のモニタリング調査から、現地ほ場において耐性菌が生存している可能性は低いと考えられたため、令和5年から県内全域の一般ほ場において、本系統薬剤の本田地上散布剤及びヘリ防除剤の使用を可能としている。ただし、耐性菌の再発生を防ぐために、本系統薬剤の同一年における連用と採種ほ場及びその周辺ほ場における使用を控える。
- 防除にあたっては、農薬の使用基準を遵守するとともに、使用上の注意事項を守り、散布作業者の安全の確保に努める。

4 穂 肥

早生品種で幼穂形成期となり、順次穂肥施用時期を迎えるため、品種ごとに生育量や葉色を診断しながら、適正な窒素量を施用する。

(1)「ひとめぼれ」「コシヒカリ」「星空舞」の穂肥の考え方

施用時期が早いと、下位節間の伸長によって倒伏が助長され、玄米品質の低下につながる。施用時期が遅いと、玄米タンパク含量が多くなって食味値が低下する他、収穫時に青籾が残ることで刈遅れを助長するため、穂肥施用に当たっては、特に葉色・草姿の観察を行い、施用時期・施用量を決定する。

(2)「きぬむすめ」「日本晴」の穂肥の考え方

「コシヒカリ」に比べて倒伏しにくく、生育維持に必要な窒素量が多いため、「コシヒカリ」と同様の幼穂長で窒素量を抑えた穂肥を施用すると収量・品質が大きく低下する。穂肥Ⅰで十分な粒数を確保し、穂肥Ⅱで登熟期間に必要な肥料分を補給することが、中生品種の収量・品質向上のポイントとなる。

※ 「日本晴」については、平成26年に農業試験場において、穂首分化期追肥の有効性が確認されている。

→ 出穂前32日頃(ラグ期)に窒素成分で2kg/10a 追肥することにより7%増収

(3) 穂肥Ⅰができない場合であっても、穂肥Ⅱは積極的に施用。

高温年では、稲体に蓄積した栄養が、呼吸によって消費される量が多くなり葉色が早く低下する。登熟期間に光合成能力と稲体の活性を維持し、籾への転流を促進することで、白濁未熟粒の発生を軽減するために、**穂肥Ⅱの施用が重要**である。穂肥Ⅱの施用時期は、「コシヒカリ」「ひとめぼれ」は出穂前10日(葉耳間長0cm時)、「きぬむすめ」「日本晴」では、葉色を極端に低下させない必要があり、穂肥Ⅰの10日後に施用するため、出穂前15日(葉耳間長－10cm時)である。

※ 適正時期、適量の施用であれば食味値に対する影響は小さく、玄米の充実度を向上させる効果が期待できる。

穂肥の施用時期・施用量の目安

☆出穂までの日数はその年の気象条件等により大きく変わるため、幼穂長による判断が原則。

品 種	I・II	施用時期	施用量(10a当たりの窒素成分量)																							
ひとめぼれ	穂肥Ⅰ	幼穂長3～5mm (出穂前18～20日)	葉色4.0(SPAD34)以下 2kg																							
	穂肥Ⅱ	第1回目穂肥の10日 後	葉色4.5(SPAD37)以下 2kg																							
コシヒカリ	穂肥Ⅰ	幼穂長8～10mm (出穂前15～18日)	葉色4.0(SPAD35)以下 2kg ※葉色が濃い場合は単葉葉色4.0以下になるまで待つて 施用する。 ※コシヒカリについて、生育量が多い場合は以下の表を 目安に施用時期を遅らせる。(遅らせる日																							
			<table><tr><th rowspan="2">草丈 cm</th><th colspan="4">幼穂形成期茎数 本／㎡</th></tr><tr><th>460</th><th>490</th><th>510</th><th>530</th></tr><tr><td>70</td><td>1</td><td>3</td><td>5</td><td>7</td></tr><tr><td>75</td><td>7</td><td>9</td><td>11</td><td>12</td></tr><tr><td>80</td><td>13</td><td>15</td><td>17</td><td>18</td></tr></table>	草丈 cm	幼穂形成期茎数 本／㎡				460	490	510	530	70	1	3	5	7	75	7	9	11	12	80	13	15	17
草丈 cm	幼穂形成期茎数 本／㎡																									
	460	490	510	530																						
70	1	3	5	7																						
75	7	9	11	12																						
80	13	15	17	18																						
	穂肥Ⅱ	穂肥Ⅰの8日後	葉色3.5(SPAD32)以下 2kg 葉色3.5～4.0(SPAD32～35) 1kg 葉色4.0(SPAD35)以上 無施用																							
星 空 舞	穂肥Ⅰ	幼穂長8～10mm (出穂前15～18日)	葉色4.0(SPAD35)以下 2kg 葉色4.0(SPAD35)以上 無施用																							
	穂肥Ⅱ	穂肥Ⅰの8日後	葉色3.5(SPAD32)以下 2kg 葉色3.5～4.0(SPAD32～35) 1kg 葉色4.0(SPAD35)以上 無施用																							
きぬむすめ 日 本 晴	穂肥Ⅰ	幼穂長1mm (出穂前25日)	葉色4.5(SPAD38)以下 3kg																							
	穂肥Ⅱ	穂肥Ⅰの10日後	葉色5.0(SPAD41)以下 2kg																							

注) 単葉葉色は最上位の完全展開葉を測定する

(4) 基肥一発肥料で葉色が低下した場合

基肥一発肥料、育苗箱専用肥料等により一発型施肥を行ったほ場では、高温年には肥料成分が早期に溶出し、穂肥としての効果が期待できない場合があるので葉色に応じて穂肥を施用する。

穂肥Ⅱの頃まで待つても葉色が極めて薄い場合は、

(「コシヒカリ」SPAD 値 32 以下、「ひとめぼれ」同 37 以下、「きぬむすめ」同 41 以下)

「コシヒカリ」「ひとめぼれ」は窒素 1kg/10a 程度、

「きぬむすめ」「日本晴」は窒素 2kg/10a 程度

の追肥を行うことで、白濁粒の発生が軽減し品質が向上し、かつ食味値も低下しない試験事例がある。

基肥一発施肥体系の「星空舞」も、葉色が極端に薄い(SPAD 値 32 以下)場合は、JA、普及所等に相談の上、穂肥施用を検討する。

田植時期別の幼形期予測について（令和8年7月20日現在）

令和2年度から、鳥取県産米改良協会では、鳥取県農業試験場の研究成果を活用し、生育予測について情報提供を行っています。（毎週水曜日更新予定）

令和2年度から幼形期予測については、発育指数を用いた手法で研究を行ってきました。令和8年度も引き続き、情報提供を行い、ご意見・ご要望をいただきながら、今後の改善に繋がってきたいと思います。

【情報を活用する上での注意点】

○ここでの幼形期は、発育指数で、幼穂長1mmとなる日のことです。

○1kmメッシュの気温を用いて、きぬむすめ生育予測モデル式に当てはめて幼形期を予測しています（現地での誤差確認を行っていますが、予測日の推定精度は概ね±2日以下となっています）。

○あくまでも目安であり、地形、かんがい水温などのほ場条件、水管理、施肥などの栽培条件等によっては誤差がでることがあります。

【現時点での状況】

○農試作況田の直近5年間の平均幼形期と比較した結果は、以下のとおりです。

○今年度は移植後で平年より気温が高く推移し、「ひとめぼれ」では幼穂形成期の予測日が実測日より4日早く「コシヒカリ」では2日早くなりましたが、他の品種においても予測に誤差が生まれる可能性も考えられるため、実際の生育に注視したうえで判断してください。

○昨年同時期の予測と比較して、同程度～3日程度早い傾向にあります。

農試作況田（標高9m）での予測

		R8予測日	R8実測日	直近5年平均	備考
ひとめぼれ	5月11日移植	6月26日	6月30日	7月1日	-
コシヒカリ	5月11日移植	7月2日	6月30日	7月4日	-
	5月25日移植	7月13日	7月13日	7月12日	-
きぬむすめ	5月25日移植	7月24日		7月25日	1日早い

【ひとめぼれの予測幼穂形成期】

標高	田植時期			
	4月30日	5月10日	5月20日	5月30日
0～49m				
50～99m				
100～149m				
150～199m				
200～249m				
250～299m				
300～349m				
350～399m				
上記予測日の範囲				

予測日を過ぎたため、
掲載を終了します

【コシヒカリの予測幼穂形成期】

標高	田植時期				
	4月30日	5月10日	5月20日	5月30日	6月10日
0～49m					7月19日
50～99m					7月20日
100～149m					7月20日
150～199m					7月21日
200～249m					7月21日
250～299m					7月21日
300～349m					7月22日
350～399m					7月22日
上記予測日の範囲					±2日

【きぬむすめの予測幼穂形成期】

標高	田植日				
	5月10日	5月20日	5月30日	6月10日	6月20日
0～49m		7月19日	7月26日	7月29日	8月4日
50～99m		7月20日	7月26日	7月29日	8月4日
100～149m		7月20日	7月27日	7月30日	8月4日
150～199m		7月20日	7月27日	7月30日	8月4日
上記予測日の範囲		±2日	±2日	±1日	±1日

【その他】

- ・幼形期予測は、発育速度を算出する生育予測モデル式(堀江・中川1990)を参考にして行っている
- ・用いた気象データは、予測当日まではアメダス観測地点の実測、翌日～1ヶ月先までは気象庁の1ヶ月予報、1ヶ月先以降は平年値データを1kmメッシュごとに展開したデータを活用。
- ・5月移植の予測は稚苗移植、6月移植は中苗移植で算出。
- ・出穂期予測に必要な気象データは、農研機構と㈱ライフビジネスウェザーが共同開発し、㈱ライフビジネスウェザーが提供するメッシュ農業気象システムの気象データを用いています。
- ・幼形期を予測したいほ場の標高は、地図等で検索してください。

【星空舞の予測幼穂形成期】

- ・星空舞の幼穂形成期は、コシヒカリの幼穂形成期の5日後を目安にしてください(5月下旬移植の場合)。

田植時期別の出穂期予測について（令和8年7月20日現在）

令和2年度から、鳥取県産米改良協会では、鳥取県農業試験場の研究成果を活用し、幼穂形成期、出穂期、刈取適期の予測について情報提供を行います。（毎週水曜日更新予定）

出穂期、刈取適期の予測を行いますので、追肥・出穂前後の防除等の作業計画、適期収穫を目指した収穫作業計画の参考として活用してください。

なお、収穫適期予測については、8月上旬から提供予定です。

【情報を活用する上での注意点】

○出穂期は、ほ場の約50%が出穂している状況のことです。穂揃期と異なります。

○アメダスの実測値及び1ヶ月予報値を基に各1kmメッシュの気温を推定し、この数値を品種ごとの生育予測モデル式に当てはめて出穂期を予測しています。（現地での確認を行いました、予測日の推定精度は概ね±2日以下となっています）

○あくまでも目安であり、地形、かんがい水温などのほ場条件、水管理、施肥などの栽培条件等によっては誤差がでることがあります。

○星空舞の生育予測については、HPの公開は行いません。よって、担当者限りでご利用ください。

【現時点での状況】

○現時点での予測では、昨年同時期の予測と比較して、同程度～1日程度早い傾向にあります。

○8/12以降の予測は、平年値（直近30年）が使用されており、今後変動する可能性が高いため、あくまで目安としてご参照ください。

農試作況田での予測

		R8予測日	R8実測日	直近5年平均	備考
ひとめぼれ	5月11日移植	-	7月21日	7月24日	-
コシヒカリ	5月11日移植	7月24日		7月26日	2日早い
コシヒカリ	5月25日移植	8月2日		8月2日	同程度
星空舞	5月25日移植	8月7日		8月7日	同程度
きぬむすめ	5月25日移植	8月14日		8月14日	同程度

【ひとめぼれの予測出穂期】

標高	田植日			
	4月30日	5月10日	5月20日	5月30日
0～49m	7月15日	7月18日	7月23日	7月31日
50～99m	7月16日	7月19日	7月24日	7月31日
100～149m	7月18日	7月20日	7月25日	8月1日
150～199m	7月19日	7月21日	7月26日	8月2日
200～249m	7月20日	7月22日	7月27日	8月2日
250～299m	7月21日	7月23日	7月28日	8月3日
300～349m	7月23日	7月25日	7月29日	8月4日
350～399m	7月24日	7月26日	7月30日	8月5日
上記予測日の範囲	±4日	±4日	±3日	±2日

【コシヒカリの予測出穂期】

標高	田植日				
	4月30日	5月10日	5月20日	5月30日	6月10日
0～49m	7月18日	7月22日	7月28日	8月4日	8月7日
50～99m	7月20日	7月23日	7月29日	8月4日	8月8日
100～149m	7月21日	7月24日	7月29日	8月5日	8月8日
150～199m	7月22日	7月25日	7月30日	8月5日	8月8日
200～249m	7月23日	7月26日	7月31日	8月6日	8月9日
250～299m	7月24日	7月27日	8月1日	8月7日	8月9日
300～349m	7月26日	7月28日	8月1日	8月7日	8月10日
350～399m	7月27日	7月29日	8月2日	8月8日	8月10日
上記予測日の範囲	±4日	±3日	±3日	±2日	±2日

【星空舞の予測出穂期】

標高	田植日			
	5月10日	5月20日	5月30日	6月10日
0～49m	7月27日	8月2日	8月8日	8月12日
50～99m	7月28日	8月3日	8月8日	8月12日
100～149m	7月28日	8月3日	8月8日	8月12日
150～199m	7月28日	8月3日	8月8日	8月12日
200～249m	7月29日	8月3日	8月8日	8月12日
250～299m	7月29日	8月4日	8月9日	8月13日
上記予測日の範囲	±2日	±1日	±1日	±1日

【きぬむすめの予測出穂期】

標高	田植日				
	5月10日	5月20日	5月30日	6月10日	6月20日
0～49m	8月4日	8月9日	8月15日	8月18日	
50～99m	8月5日	8月10日	8月16日	8月18日	
100～149m	8月6日	8月11日	8月16日	8月19日	
150～199m	8月6日	8月11日	8月17日	8月19日	
上記予測日の範囲	±3日	±2日	±2日	±2日	

【その他】

- ・出穂期予測は、発育速度を算出する生育予測モデル式(堀江・中川1990)を参考にして出穂期予測を行っています。
- ・用いた気象データは、予測当日まではアメダス観測地点の実測、翌日～1ヶ月先までは気象庁の1ヶ月予報、1ヶ月先以降は平年値データを1kmメッシュごとに展開したデータを活用。
- ・5/10～5/30の予測は稚苗移植、6/10は中苗移植で算出。
- ・出穂期予測に必要な気象データは、農研機構と㈱ライブビジネスウェザーが共同開発し、㈱ライブビジネスウェザーが提供するメッシュ農業気象システムの気象データを用いています。
- ・出穂期を予測したいほ場の標高は、地図等で検索してください。

参考資料3(穂肥時期の目安)

【穂肥Ⅰの時期】

- 穂肥Ⅰの時期は、幼穂長で判断する。幼穂形成期予測の時期が近づいたら、ほ場で実際の幼穂長を確認すること。
- 水口を避け、畦際から4条以上ほ場内に入って、平均的な株の最長茎を選んで計測する。株による変動もあるため複数の茎で確認すること。



図1: 出穂25日前

**きぬむすめ
穂肥Ⅰ時期**

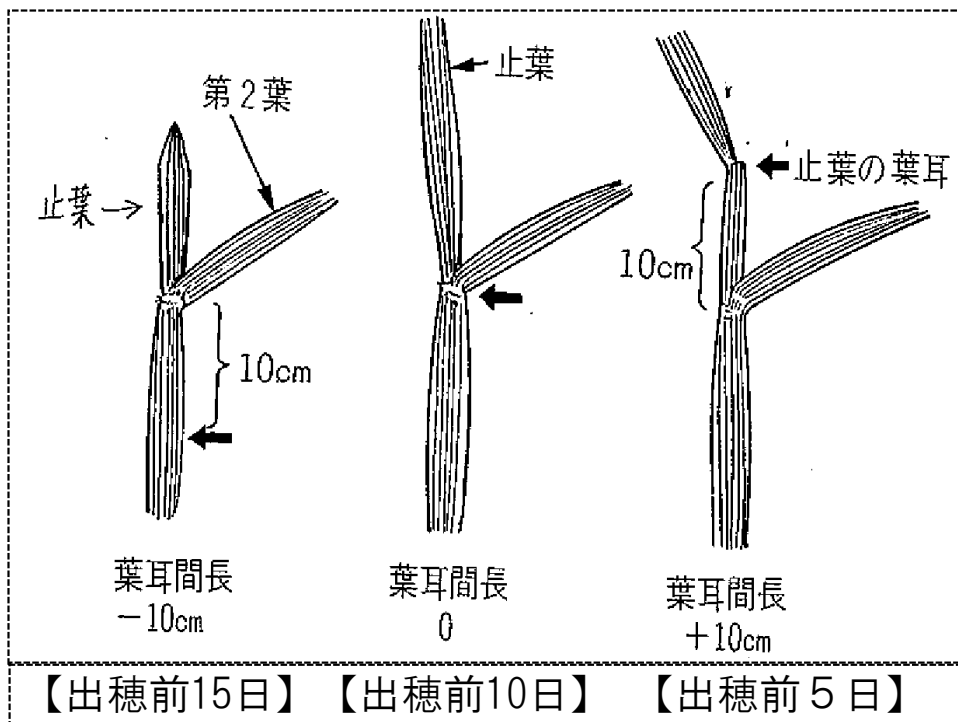


図2: 出穂18日前

**コシヒカリ・星空舞
穂肥Ⅰ時期**

【穂肥Ⅱの時期】

- 幼穂長ではなく、外観、具体的には葉耳間長で出穂前日数を判断し、穂肥Ⅱ施用時期を決定する。
 - 当該葉耳間長の茎が全体の8割程度となったら穂肥Ⅱ施用時期とする。
 - 穂肥Ⅰの施用後日数の判断でもよい。
- 例) きぬむすめは、穂肥Ⅰを施用してから10日後に穂肥Ⅱを施用する。



**きぬむすめ
穂肥Ⅱ時期**

**ひとめぼれ・コシヒ
カリ・星空舞
穂肥Ⅱ時期**

※「節水栽培」とは、生育段階別の水の必要度に応じて最低必要量を使用し、用水を節減する方法です。

水稻節水栽培の目安表

生育段階		用水の必要度	土壌水分の限度
有効分げつ期	(活着後から田植後 25～33 日頃まで)	△	黒乾きまで
無効分げつ期		▲	白乾きまで
幼穂形成期	(出穂前 25～15 日)	◎	黒湿りまで (飽和状態を保つ)
穂ばらみ期	(出穂前 15 日～出 穂始)	◎	
出穂開花期	(出穂始～出穂揃 い)	◎	
登熟前期	(出穂開花期後 20 日頃まで)	○	
登熟後期	(出穂開花後 20 日 ～落水期(成熟期前 5 日～7 日))	△	黒乾きまで

注1) 用水の必要度 ◎：大、○：中、△：少、▲：微 を示す。

注2) 土壌水分は、水稻の生育収量に大きな影響を与えないと考えられる最低の土壌水分であり、この状態に達したものについてはかん水する必要がある。

用水不足の水稻への影響と具体的な節水栽培法

生育段階	用水不足の影響	かん水の方法
有効分げつ期	分げつが阻害され、穂数が減少します。しかし、畑状態の土壤水分（60％程度）であれば、影響は少ない。	朝、葉の先端から露が出ている状態で、田面は黒乾き程度。これを目安に浅水かん水又は走り水を行いましょう。
無効分げつ期	中干し時期に当たり、多少水分がなくても収量への影響は少ない。	ほ場の周りの稲が萎凋しはじめたら、走り水を行いましょう。
幼穂形成期	一穂粒数の減少や穎花の奇形を招きます。	常時湛水の必要はありませんが、土壤水分は最低でも飽和状態が必要です。黒湿り状態で手で握れば土がだんご状となる程度を保つようにかん水しましょう。
穂ばらみ期	幼穂が急速に伸長する時期で、最も水不足の影響を受けやすい。花粉の形成ができなくなり、出穂しても一部は白穂となり大幅に減収する。	
出穂開花期	穂の抽出が妨げられて、出すくみに <u>なったり</u> 、開花や受精が妨げられて不稔になる。	
登熟期	出穂開花後 20 日頃までは粒が急速に発達する時期で、米粒の発育が劣り、粒重が軽くなり、くす米が多くなる。	前半は田面が黒湿り状態、後半は黒乾き状態の水分を保つように走り水を行いましょう。

〈全般的な用水不足対策〉

- 水を無駄にしないよう、水路や畦畔からの漏水防止に努めましょう。
- 少量のかん水では水の走りが悪くなるので、溝切りをして、水がほ場全体に行きわたるようにしましょう。
- 肥料の効いた葉色の濃い稲ほど用水不足に弱いため、穂肥は窒素過多にならないように注意しましょう。

令和8年度病害虫発生予察注意報第4号

令和8年7月22日

鳥取県病害虫防除所

注意報の概要

7月中旬現在、平坦地～中間地では、幼穂形成期～出穂期の水田へイネカメムシが飛来しており、一部地域では多発ほ場が確認されている。また、水田周辺のイネ科雑草地や畦畔等においても斑点米カメムシ類の発生が平年より多い。

今後、極早生品種から順次出穂期を迎えるにあたり、水田での発生量の増加が懸念されることから、被害を最小限に抑えるために防除を徹底する。

病害虫名：斑点米カメムシ類（イネカメムシ、アカスジカスミカメ、クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、トゲシラホシカメムシ、シラホシカメムシ等）

- 1 対象作物 イネ
- 2 発生地域 県内全域
- 3 発生量 多い
- 4 注意報発令の根拠

(1) 7月13～16日、病害虫防除所の中間地～平坦地の巡回調査定点11地区では、幼穂形成期～出穂期の水田（主に極早生及び早生品種）においてイネカメムシの見取り調査及び捕虫網によるすくい取り調査を実施した結果、複数地区で本種の発生を確認した（調査地区数：東部3、中部3、西部5、イネカメムシ確認地区：東部1、中部1、西部2）。発生が多いほ場では、25往復50回振りすくい取り虫数が100頭を超えている。

(2) 令和6～7年にイネカメムシが発生した地域を中心に、幼穂形成期～出穂期の水田へのイネカメムシの飛来が確認されている。また、粘着板によるトラップ調査においても、複数地点の水田（幼穂形成期～出穂期）で本種の捕獲が確認されている。

(3) 水田周辺のイネ科雑草地や畦畔等では、主にアカスジカスミカメ、クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、トゲシラホシカメムシ、シラホシカメムシが発生している。

7月13～16日に行ったイネ科雑草地すくい取り調査の結果、アカスジカスミカメは平年よりやや多く、過去の注意報発表年とほぼ同等の発生量である。また、イネカメムシ、ホソハリカメムシ、トゲシラホシカメムシ及びシラホシカメムシの発生は平年より多い（表1）。

(4) 7月16日発表の向こう1か月の気象予報によると、平年と同様に晴れの日が多く、気温は高いと予想されており、今後もカメムシ類の活動及び増殖に好適な条件になると見込まれる。

5 防除上注意すべき事項

(1) イネカメムシ

ア イネカメムシは、その他の斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ、ホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ等）とは異なり、イネ科雑草での増殖個体数は少なく、雑草管理では発生密度を低減する効果は期待できない。そのため、水和剤もしくは粉剤による本田防除を徹底する。

イ 発生が多い地域では、①出穂期～出穂直後（不稔対策）、②穂揃い期～乳熟初期（1回目の7～10日後）（斑点米対策）の2回防除を行う。出穂期にイネカメムシによる集中加害を受けると、著しい不稔が発生することから、特に昨年被害が発生した多発地域で

は、減収防止のために出穂期の防除を徹底する。

ウ 本種の未確認地域、少発生地域では、出穂前後の慣行防除の徹底により、発生地域拡大と地域全体の発生量増加を防ぐ。

エ 周辺より出穂が極端に早い、又は遅いほ場では、本種の成虫飛来が集中するため、このような条件のほ場では発生状況を注意深く観察し、発生が確認された場合は防除を徹底する。

(2) その他の斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ、クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、トゲシラホシカメムシ、シラホシカメムシ等）

ア 水田周辺の雑草地、畦畔等のイネ科雑草はカメムシ類の増殖源となるので、適正な管理を行う。出穂20～14日前頃に畦畔等の草刈りを行ったほ場では、再生したイネ科雑草が出穂する前に再度草刈りを行うと、カメムシ類の密度がさらに低下する。一方、出穂20～14日前頃に畦畔等の草刈りを行っていないほ場では、穂揃い期から乳熟期に草刈りを行い、その直後に、水田に追い込まれたカメムシ類を粉剤、水和剤等で防除する。

イ 薬剤防除は適期に行う。

(ア) 粉剤、水和剤等を使用する場合

薬剤防除は穂揃い期から乳熟初期に行い、その後も発生が多い場合は7～10日間隔で1～2回の追加防除を行う。防除は地域一斉で行うと効果が高い。なお、出穂前散布の防除効果は期待できない。

(イ) 粒剤を使用する場合

発生の主体がアカスジカスミカメの水田では、粒剤による防除も可能である。病害虫防除指針等を参考にして、各薬剤の散布適期に湛水散布を行う（湛水散布にあたっては、農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項等を確認するとともに、止水期間を1週間程度とし、また、農薬の流出を防止するために必要な措置を講じるように努める）。また、散布後も発生が多い場合は粉剤、水和剤等で追加防除を行う。

ウ 防除薬剤は表2を参考とする。薬剤散布にあたっては、農薬の使用基準を遵守するとともに、使用上の注意事項を守り、散布作業者の安全の確保に努める。また、蜜蜂被害軽減対策等に注意する。

エ クモヘリカメムシ及びホソハリカメムシはイネの登熟後期まで水田内で発生する。そのため、これらの種の発生が多いほ場では防除後も発生状況に十分注意し、要防除水準（25往復50回振りすくい取り虫数4頭以上）を超えた場合は直ちに追加防除を行う。

オ 水田内で穂をつけたヒエ類はカメムシ類の発生を助長するので、見つけ次第抜き取る。

表1 水田周辺のイネ科雑草地等における斑点米カメムシ類の発生状況（7月中旬調査）

調査年	斑点米カメムシ類の種類別成幼虫数						合計
	アカスジカスミカメ	クモヘリカメムシ	ホソハリカメムシ	トゲシラホシカメムシ	シラホシカメムシ	イネカメムシ	
令和8年	306.6	8.8	4.7	3.6	2.0	4.8	330.5
	(94.8%)	(32.8%)	(69.0%)	(37.9%)	(8.6%)	(8.6%)	
平年	272.2	15.7	2.6	1.3	1.3	0.0	293.1
	(86.1%)	(32.5%)	(38.4%)	(8.4%)	(10.3%)	(0.0%)	

注) 数字は捕虫網5往復10回振りすくい取り成幼虫数、括弧内は発生か所率を示す。巡回調査定点地区及びその周辺地区のイネ科雑草地（2～3か所／地区）等を調査（23地区58か所調査）。

平年値は平成28年～令和7年の平均値（令和2年及び令和3年は調査未実施）。



写真1 イネカメムシ成虫
(体長約13mm)



写真2 イネカメムシの加害
による不稔穂



写真3 イネカメムシの加害
による基部斑点米

(その他の斑点米カメムシ類)



写真4 アカスジカスミカメ



写真5 クモヘリカメムシ



写真6 ホソハリカメムシ



写真7 トゲシラホシカメムシ

表2 イネカメムシに対する主な防除薬剤

薬剤名	使用時期	使用回数	IRAC コード
スタークル液剤10	収穫7日前まで	3回以内	4 A
ダントツフロアブル	収穫7日前まで	3回以内	4 A
エクシードフロアブル	収穫7日前まで	3回以内	4 C
キラップフロアブル	収穫14日前まで	2回以内	2 B
トレボン乳剤	収穫14日前まで	3回以内	3 A

注1 農薬の登録内容は令和8年7月21日現在

注2 IRAC コードは殺虫剤の作用機構による分類を示す。

表3 その他の斑点米カメムシ類に対する主な防除薬剤

薬剤名	使用時期	使用回数	IRAC コード
スタークル液剤10	収穫7日前まで	3回以内	4 A
ダントツフロアブル	収穫7日前まで	3回以内	4 A
キラップフロアブル	収穫14日前まで	2回以内	2 B
トレボン乳剤	収穫14日前まで	3回以内	3 A
キラップ粒剤	収穫14日前まで	2回以内	2 B
ジノテフラン粒剤 (商品名: アルバリン粒剤/ スタークル粒剤)	収穫7日前まで	3回以内	4 A

<お問い合わせ>

鳥取県病害虫防除所（電話：0857-53-1345）

この情報は、鳥取県病害虫防除所ホームページで公開しています。

アドレスは、<https://www.pref.tottori.lg.jp/boujosyo/> です。



ホームページQRコード

引き続き、農作業安全と熱中症防止に留意しましょう

「あと少し」の無理が命取り！

熱中症は

です

- ☑ 天気予報・体調を確認
- ☑ こまめな水分補給と休憩
- ☑ 涼しい服装・対策グッズの活用
- ☑ 単独作業を避ける・単独作業の場合は連絡をとり合う

農作業中の熱中症救急搬送件数

年度	搬送件数(件・県内)
R1	52
R2	72
R3	42
R4	65
R5	58
R6	68
R7	45

鳥取県農作業安全・農機具盗難防止協議会

事務局 JA鳥取県中央会JA総合支援部農業くらし対策室 電話:0857-21-2633
鳥取県農林水産部農業振興局経営支援課 電話:0857-26-7327

農作業中の熱中症の予防管理

○ 高温時の作業を避けましょう

- 最高気温30℃以上が3日以上予想される場合には熱中症警戒期間が発表され、最高気温35℃以上が3日以上予想される場合には熱中症特別警戒期間が発表されます。
- 天気予報や県の「あんしんトリピーメール」等で情報を入手しましょう。

○ こまめに休憩し、水分を補給しましょう

- 農作業には必ず水、氷(保冷剤)や濡れタオルなどを持参しましょう。
- 涼しい日陰等で休憩し、20分ごとにコップ1～2杯の水分と適宜塩分も補給しましょう。

○ 涼しい服装で、体温を調節しましょう

- 農作業の際は帽子を着用し、汗を吸いやすく乾きやすい素材の衣服を着用しましょう。
- 空冷ファン付き着衣や冷却グッズを有効活用し、作業中の体温を調節しましょう。

○ 作業は2人以上で行いましょう

- 急に動けなくなることがあるため、1人での作業は避けましょう。
- 1人で作業する場合は、必ず、家族等に作業場所と帰宅予定時刻を伝えましょう。

○ 天気予報の暑さ指数(WBGT)を見ましょう

- 今日、明日の作業強度が高い場合は、軽い作業へ変更しましょう。
- 変更が難しい場合は、作業する時間帯を朝夕の時間帯にずらしましょう
- 休憩や給水の回数を増やしましょう。

暑さ指数に応じた作業の目安を参考にしましょう

作業強度／WBGT基準値	農作業の例
作業は原則中止／31以上	・ 冷房の効いた室内での軽作業のみとする
軽作業（厳重警戒必要）／30	・ 楽な座位、立位、軽い手作業（書く、簿記など） ・ 手及び腕の作業（点検、組み立てや軽い材料の区分け） ・ 腕と足の作業（普通の状態での乗り物の運転、足のスイッチやペダルの操作）
中程度の作業（警戒を怠らない）／28 	・ トラクターや重機の操作、草むしり、果物や野菜の収穫 ・ 軽量の荷車や手押し車を押したり引いたりする
重労働（積極的に水分補給）／25 	・ シャベルを使って少量の土の移動、刈払い機で草刈り ・ 重い荷物の荷車や手押し車を押したり引いたりする
ほぼ安全／21	・ 激しくシャベルを使ったり掘ったりする、鍬で畑を耕す